富山大学人間発達科学部紀要　第13巻第2号：305－317（2018）　研究ノート

幼児の歌唱活動における伴奏のアレンジ方法
－領域「表現」に基づいて－

千田　恭子[1]・石川　真子[2]

Approach for Arranging Accompaniment to Young Children's Singing Activities
－ Based on the Area of "Expression" －

Kyouko SENDA, Mako ISHIKAWA

E-mail: senda@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：簡易楽譜，伴奏，アレンジ，歌唱活動，表現
Keywords：Simple musical score, accompaniment, arrange, Singing activity, Expression

Ⅰ　歌唱活動と伴奏

幼児の音楽表現の中心となり，日常的な部分を占める活動は歌う活動であると言える（庄司，2010）。

横井（2011）は，ある県の幼稚園・保育所に勤める幼稚園教諭・保育士に対し，普段どのような表現活動（音楽に関わるもの）を行っているのかというアンケートを行い，歌唱活動はリズム体操に次いで2番目に多いという結果を得ている。また虻川（2006）は，ある県内の24園で行われている音楽活動の種類について調べている。歌，合奏，リズム遊び（運動），子守歌，BGMとしての音楽の使用，ダンス，鑑賞が挙げられていたが，24園に共通していた音楽活動は，歌唱活動であった。歌唱活動やリズム遊びは比較的簡単に行うことができるため，どの園でも日常的に行っているのではないだろうか。またこの2つは，日常的な保育生活の中だけではなく，生活発表会や運動会などの特別な行事，入園式や卒園式などの節目の行事などでも歌唱活動は行われている。これらのことから，歌唱活動は，保育所あるいは幼稚園，認定こども園などの日常生活において欠かせないものであるといっても過言ではない。

一方，歌唱活動において必要となるものの一つに伴奏がある。使用する楽器が決められているわけではないが，ピアノやオルガンなどを使用することが多いのが現状であろう。松本（2001）は，幼稚園・保育所に勤めている教諭・保育士に対し，保育現場でどのようにピアノ・オルガンを使用しているのかということについてアンケートを行っている。その中で，歌唱活動の際にピアノ・オルガンを使用しているという回答者は，全体の84.7％であった。その他の伴奏にはCDやカセットもあるが，歌を歌う際にそれらを使用しているという回答者は全体の36.5％であった。ピアノ・オルガンよりもCD・カセットの方が比較的簡単に使用できるはずだが，使用頻度は低いということが分かる。文献の中では，予測不能な子どもたちの動きにはピアノ・オルガンの方が柔軟に，臨機応変に対応できるためこのような使用頻度なのではないかということが記されている。確かに，ピアノ・オルガンならば子どもたちの歌うペースが遅くても自由自在に変化させることもでき，また，歌の楽譜の調が子どもたちの声域に合わない時にもピアノ・オルガンであれば移調をすることも可能であり，さらに，子どもたちの興味を向けるために強弱や速さなどに様々な変化を加えることもできる等が考えられることから，ピアノ・オルガンの方が保育現場で使いやすいのであろう。しかし，ピアノやオルガンは誰にでも簡単にすぐに弾け

[1] 富山大学人間発達科学部
[2] 富山市立月岡保育所

る楽器ではない。同文献ではピアノ・オルガンの技術面についても調査をしているが，得意と答えた回答者は全体の 17.9%であり，多いとは言えない数である。この結果は日本中の保育士・幼稚園教諭に聞いたものではないが，広く見ても子どもたちの前ですぐに自信をもって弾けるという人はあまり多くないのではないかと予想する。そこで重宝されるのが簡易伴奏譜である。簡易伴奏譜は原曲の楽譜を比較的簡単にしたもので，ピアノ・オルガンが苦手な人でも比較的弾きやすい楽譜である。しかし，簡易伴奏譜で伴奏を弾く時に違和感を覚える人は少なからずいるのではないだろうか。要因としては音の簡素化，伴奏形態の変化や跳躍音の使用が少ないなど，様々なことを挙げることができるだろう。

Ⅱ　音楽活動の位置づけと音による表現

本研究での歌唱活動は，歌詞の言葉や意味をある程度理解していることが必要だと考えるため，3 歳以上の子どもを対象とした活動とし，保育の中でどのように位置付けられているのかを考えていく。

保育所保育指針（2018），幼稚園教育要領（2018），幼保連携型認定こども園教育・保育要領（2018）の領域「表現」に関するねらい及び内容には『④感じたこと，考えたことなどを音や動きなどで表現したり，自由にかいたり，つくったりなどする。』『⑥音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。』以上の 2 つが挙げられている。さらに，内容の取扱いとして『豊かな感性は，身近な環境と十分に関わる中で美しいもの，優れたもの，心を動かす出来事などに出会い，そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し，様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際，風の音や雨の音，身近にある草や花の色など自然の中にある音，形，色などに気付くようにすること』と記されている。

現代は，テレビやスマートフォンなど様々な家電，電子機器の発達により，子どもの頃から様々な音楽に触れる機会がある。また，習い事を幼少期から始める子どもたちも増えてきており，ピアノやオルガン，キーボードなど音楽に親しむ子どもも多くなっている。このように乳幼児期から様々な音，音楽に触れていることが予想される子どもたちに，ピアノ・オルガンが苦手だからと言って，音が簡素な伴奏譜ばかりを使用して歌唱活動を行うことは，子どもたちの音楽離れにつながることにならないだろうか。様々な音に取り囲まれている子どもの中には，主要三和音の繰り返しや違和感がある音が使用されている伴奏では，楽しみが半減したり，マンネリ化して飽きてしまうなどの感情に繋がる可能性もあり得る。そのような時には簡単なアレンジを行うことが有効だと考える。

後藤・紙屋（2008）は，子どもの歌の伴奏のアレンジによる子どもたちの実際の反応を調べ，元の伴奏で数回歌った後にアレンジ譜を使用すると，子どもたちは興味を示したと述べている。また酒井（2008）も，効果的な伴奏にするためのアレンジ法を提案していた。ただ，現役の保育者は毎日が忙しく，伴奏のアレンジに時間を割くことは難しいだろう。また，ピアノ・オルガンを弾くことが苦手な保育者がいることも現実である。しかし，保育者が楽譜に少し手を加える，もしくは子どもに簡単な楽器を使用させることにより，楽曲の世界を子どもと一緒に作り出し，子どもが感じたことを表現することができれば，子どもの音に関する感覚が磨かれて行くのではないだろうか。頻繁に行われる活動だからこそ，保育者は子どもたちが楽しめるように常に工夫し続けることが必要であろう。

以上のことから，子どもを飽きさせず，ピアノを弾くことがあまり得意でない人でもできる，子どもの歌における伴奏譜のアレンジ法を探っていくことにする。

Ⅲ　研究方法

1．楽曲の選別

アレンジ法を導くための手段としてまず，簡易伴奏譜の特徴を見いだし，そこからどのようにアレンジを行うことが有効か考えていく。また，簡易伴奏譜の明確な定義はないため，ここでは，簡易伴奏譜を「ピアノを弾くことがあまり得意ではない人でも簡単に弾くことができるように，元の楽譜を簡単にアレンジしたもの」と定義する。

子どもの歌における伴奏譜の分析を行う。選曲については，比較的新しい研究だったこと，結果として挙げられていた曲数が多かったことから，大野・赤井（2013）と，小澤（2008）の 2 つの文献を参考

表１　簡易伴奏譜の分析に使用する楽曲（30 曲）

とけいのうた	うれしいひなまつり	アイスクリームの歌	たなばたさま	とんでったバナナ
たきび	手のひらを太陽に	しゃぼんだま	一年生になったら	こいのぼり
おもちゃのチャチャチャ	雪	アイアイ	南の島のハメハメハ	ちょうちょう
かたつむり	森のくまさん	おつかいありさん	うみ	あわてんぼうのサンタクロース
大きな古時計	世界中の子どもたちが	犬のおまわりさん	ぞうさん	ジングルベル
小さな世界	北風小僧の寒太郎	思い出のアルバム	おばけなんてないさ	山の音楽家

にした。大野・赤井は 2013 年に園でよく歌う童謡と子どもが好きな童謡について現職の保育士や幼稚園教諭にアンケートを行っている。また，小澤は 2008 年に幼稚園・保育所でよく歌われている歌について保育実習を終えた学生にアンケートを行い，幼稚園と保育所それぞれで集計結果を出している。大野・赤井（2013）の集計結果と小澤（2008）の各集計結果で共通している曲を抽出したところ，3 つとも共通していた曲は 36 曲，2 つで共通していた曲は 51 曲である。その中から，3 曲共通のものを優先的に選び，2 曲共通のものの中で，原曲のテンポがその他の曲よりも遅い，短調の曲である，季節の歌であるなど気になったものを選曲した。また，結果の中にクリスマスなど冬のシーズンに歌う曲が入っていなかったなどの理由から，季節の歌を含める意味で結果外から 6 曲，さらに，卒園シーズンの曲も分析してみたいと考えたため 2 曲取り入れた。

以上のことから，結果外から取り入れた曲を含めて表 1 に示す 30 曲を選び，分析を行うこととした。

２．使用する楽譜

使用する楽譜は難易度別に 2 冊ずつ選んだ以下の 6 冊である。

・難易度が高く，ピアノを弾くことが苦手な人には難しいが，より原曲に近い楽譜

難易度：高（上級）

①「新版　みんなのうたピアノ伴奏曲集」（発行年不明）
　編者　みんなのうた編集委員会
　著作権発行者　長谷川知彦
　発行所　株式会社光文書院

②「日本童謡唱歌全集」（1999）
　編著者　足羽章
　発行者　安永憲一郎
　発行所　株式会社ドレミ楽譜出版社

・簡易伴奏譜ではあるが，少し難易度が上がっている楽譜

難易度：中（中級）

③「やさしく弾ける　保育のピアノ伴奏」（2014）
　編者　新星出版編集部
　発行者　富永靖弘

④「保育の四季　幼児の歌 110 曲集」（2014）
　発行・発売　株式会社エー・ティー・エヌ

・簡易伴奏譜であり比較的簡単であると判断した楽譜

難易度：低（初級）

⑤「保育のピアノ伴奏　子どもの大好きなうた 150 曲」（2012）
　発行所　株式会社　日本文芸社
　監修者　阿部直美
　発行者　友田　満

⑥「やさしく弾けるピアノ伴奏　保育のうた 12 か月」（2014）
　編者　新星出版社編集部
　発行者　富永靖弘

分析は 1 曲につき 5 種類の楽譜を使用することにした。（難易度高は曲によって 2 冊のうち 1 冊を使用）。また，難易度中・低は出版年が比較的新しいものを選んだ。

３．分析と考察

分析の観点として，(1) 前奏の長さ，(2) 旋律の有無，(3) 調，(4) 伴奏譜のコード，(5) 伴奏のベース音，(6) 歌い始めから 4 小節目までにおける伴奏のリズム，(7) 伴奏の音域の差，以上 7 つの観点か

ら分析を行い，アレンジを行う際の参考点も含めて簡易伴奏譜の特徴を調べていく。

(1) 前奏の長さ

・多くの楽譜は前奏が4小節のものが多い。
・初級と中級の楽譜での差はあまりみられない。楽譜のレベルではなく，曲によって前奏の長さが変わっている。
・楽譜の難易度が上がると，前奏も長くなる傾向にある。
・上級楽譜には，前奏が無いものが他に比べて多い。これは，「こいのぼり」や「たなばたさま」などの，童謡に多い傾向がある。
・上級楽譜と初級楽譜で前奏の小節数が同じであっても，伴奏を見てみると，初級楽譜では和音のみを弾いているものなどがあり，上級楽譜では旋律につながるようなメロディーを弾いているものが多い。
・簡易伴奏譜は，伴奏を簡単にするために，歌自体にあまり関わってこない前奏・後奏を極力減らしていると考えられる。
・前奏は，歌う前の歌の雰囲気づくりに欠かせないものだと考えるので，アレンジする際には，和音だけというのは避け，メロディーに繋がるようなものが好ましいのではないか。

(2) 旋律の有無

・初級→中級→上級と難易度が上がっていくにつれて，旋律が伴奏に入っている楽譜は少なくなっている。
・旋律が入っているものは，右手はメロディー，左手が和音伴奏あるいはコードの中の主音を弾くというような構成となっている。右手がメロディーだけを弾くことは比較的簡単なので，簡易伴奏譜ではこのような伴奏法を多く取り入れられているのだろう。
・子どもたちに歌を教えるときには，歌い易くするためにも旋律が入っていた方が良い。このことも，簡易伴奏譜が多く用いられていることの原因なのではないか。
・旋律がないものは，両手を伴奏に使用できるため，より原曲のメロディーを引き立てることができていると感じた。
・アレンジをするときには，誰でも弾くことができるように，右手は旋律，左手は伴奏という形は変えず，難しくない程度に右手のメロディーに，少し音を足すという方法でアレンジする方法も考えられる。

(3) 調

・各楽譜で使用されている調について調べた結果，ハ長調，ト長調，ヘ長調，変ホ長調，変ロ長調が多かった。特に原曲が何調でも，簡易伴奏譜ではハ長調，ヘ長調，ト長調に移調されているものが多いようだ。この3つの調は調号が少なく，ピアノを弾くことをあまり得意としない人でも比較的弾きやすく簡単な調である。そのため，簡易伴奏譜ではこれらの調に移調したものが多いのではないか。
・クラシックの歌曲を移調する場合，調によっては原曲の雰囲気が損なわれてしまう場合があるが，子どもの歌に関しては，長調が短調になる（反対も含む）ということが起きない限り，雰囲気を損なうことには繋がらないのではないかと感じた。多少の違いがあるものの，どの曲も大幅に調が変わっていたわけではないため，曲の雰囲気には影響がないと判断した。また，楽譜の調を考える際には子どもの声域を考慮することが必要になるが，子どもの声域は年齢によって決まっているわけではなく，同じ年齢でも個人差が大きい。歌う子どもたちの実態によって変わってくるのではないか。よって，いつも同じ調で歌うのではなく，子どもたちに合わせて伴奏を移調する必要がある。移調はアレンジではないのだが，このような技術を身に着けておくことも望ましいのではないかと考えた。
・調に関することをアレンジに使用できないかと考えたのだが，調に関するアレンジを行おうとするとどうしても移調する必要が出てくる。移調は誰でもすぐにできるものではなく，比較的難しいものである。本研究の目的はピアノを弾くことをあまり得意ではない人でもできるアレンジ法の提案であり，移調の使用は本研究の目的から逸れると判断し，アレンジ法の提案には使用しないこととする。

(4) 伴奏譜のコード

・弾いていて違和感を覚える箇所がある楽曲でも，

和声学の観点から見ると問題はないが，運指を簡単にしようとしたことで音が不協和音を作ってしまうことがある。
- 上級楽譜になるにつれて，旋律に合わせて頻繁にコードを変化させているものが増えていく。
- 歌詞にもつながる要素として，伴奏の位置を変化させている楽譜がある。
- ピアノが苦手な人でも弾けるように，運指の範囲が狭くなっている場合がある。和声の響きなどの音楽的なことよりも，伴奏を簡単にすることを重視している部分もあるようだ。
- 簡易伴奏譜では，コードだけを見ると変化していないように見えるが，実際の音を見ると使われているコードとは全く関係のない音が使われているということが多いように感じる。
- 簡易伴奏譜では，伴奏を簡単にするためにコードをあまり変化させていないことが多い傾向にある。
- 伴奏がほぼ同じであるのに使われているコードが異なることがある。
- 旋律が変化しているのにも関わらず，前の小節と同じ伴奏になっていることがある。
- 簡単な伴奏にするために音を少なくしているが，そのために曲自体が物足りなく感じることがある。減らす音を正しく選択する必要がある。
- 簡易伴奏ではあるが，何でもかんでも簡単にしているわけではなく，曲調や旋律の動きを意識したものもたくさんある。
- 原曲に近い楽譜と使用コードが異なっても違和感が全くないことがある。アレンジする際も，和声学のルールに則っていれば，コードを変えることも可能かもしれない。
- 原曲に近い楽譜では雰囲気が変化する部分で特徴的な和音を使用していることが多く，曲の雰囲気を重視していることが分かる。簡易伴奏譜では見られないため，アレンジする際はこのような伴奏の工夫も参考にすると良いのではないだろうか。
- 簡易伴奏譜では不思議な響きを感じる音を使用するのではなく，できるだけすっきりとさせる音を使用している傾向にあるように感じる。このような伴奏は，子どもたちが歌い始めで，まだ曲に慣れていない時にはよいと思うが，慣れてきたら不思議な響きの音を使用するなどしてアレンジすると楽しいのではないだろうか。
- 原曲に近い楽譜のコードを手本にして音を足すとアレンジしやすくなると考える。
- 黒鍵を含んだ和音を使用すると難しくなってしまうが，一音のみでもフレーズの変わり目に別のコードを入れることにより曲の雰囲気が変化する。
- 必ずしも旋律に出てくる音をつかわなければならないわけではなく，ピアノをあまり弾きなれない人でもわかりやすい方法として，旋律の三度下を弾くということもある。
- シンプルな音のみで弾くと単調になってしまうので，時々第７音や第９音などを使用することにより，曲に変化が出る。和音で使用することは難しいが，音を分散させるなど，工夫の仕方は様々なので，アレンジの際に利用できるのではないか。

(5) 伴奏のベース音
- 原曲と異なると感じた部分では，ベース音に根音が使われていないというものがほとんどだった。
- ベース音はずっと根音を使用しているので同じ音であるにもかかわらず違和感がある場合もある。
- 根音をベース音にしていても，原曲と異なるコードを使用し，和音構成音が異なってしまったことで違和感に繋がっているものがある。
- 和声学のルールから考えても，和音の中で一番美しい響きになるのはベース音に根音がきたときであるが，第３音をベースにした第１転回形や，第５音をベースにした第２転回形を使用しているものもある。転回するごとに音の響きは悪くなっていくため，転調の前以外はあまり使わない方が良いのではないか。
- 根音をベース音に用いない理由は，おそらく左手の動きを大きくしないことにあると感じる。音の響きよりも弾きやすさを重視しているのであろう。

(6) 伴奏リズム
- どの楽譜も旋律のメロディーや雰囲気を意識したものになっている。
- 歌がない部分にも伴奏を取り入れている。子どもたちの興味が続くような工夫をしているといえる。
- 曲によっては初級と中級，上級でリズムの差があまりない。

・難易度が高いものほどリズムに工夫が見られる傾向がある。
・曲の長さが短く，古くからある童謡ほど，伴奏のリズムはどの楽譜でもあまり大差がないようだ。
・1曲の中でも，ずっと同じリズムを刻むよりも所々で異なるリズムを設けた方が曲に変化がでてくるのではないか。
・両手伴奏のものは，基本的に右手が旋律に近いリズム，左手が一拍ずつ刻むというものになっている。4分音符と8分音符での弾き分けが重要になるのではないか。
・すべての楽譜が4分音符でリズムを刻んでいるものもあるが，アクセントの位置によって雰囲気が変わると考える。
・両手伴奏の楽譜は伴奏に旋律が入っていないため，ピアノを弾きなれていない人には難しいのではないだろうか。また，子どもたちも旋律がないと歌いにくいため，できる限り伴奏には旋律を入れた方が良いと思われる。アレンジする際にも，子どもたちの歌いやすさを考えながら行う必要があると考える。
・連符などを伴奏に盛り込むことで楽しい伴奏になることもある。しかし，自分の技術よりも難しい楽譜を選んだり，難しいアレンジをしたりすると楽しんで弾けなくなってしまうので逆効果である。様々な楽譜があるため，自分の技術に近い楽譜を選び，弾ける範囲でアレンジを行うことが重要であろう。
・聞いているだけでは感じないが，楽譜を見ると拍子が異なっているものもある。その場合，拍の取り方も異なってくるので，そのようなところを注意して演奏することも大切であろう。

(7) 伴奏の音域の差

・原曲に近い伴奏譜の方が，簡易伴奏譜よりも最高音と最低音の差が大きい傾向にある。
・簡易伴奏譜でも高低差が8度以上のものがいくつかあるが，それは歌の部分での伴奏ではなく，後奏の1番最後の音に最高音を使っているものが多くあった。また，前奏と歌の部分での音が1オクターブ異なっているというものがあった。このように簡易伴奏譜は，歌の部分で指が大きく動くわけではなく，前奏や後奏などのピアノ・ソロの部分で，少しだけ高い又は低い音を弾くという形になっていた。反対に，難しい方の伴奏譜は，歌の部分の伴奏でも音の動きが大きいものが多くあった。
・簡易伴奏譜が歌の部分で動きが少ない理由として考えられるのは，主に右手は旋律を弾いているので動くことができる範囲がそもそも小さくなってしまうということである。ただ，旋律を弾いていない左手の動きも少ないため，指の動きを簡単にしてあることがわかる。難しい伴奏譜は旋律を弾いていないものが多くあるため，自然と使用できる音も増えてくるのであろう。
・簡易伴奏譜の伴奏の中に8度以上の音が使われていないわけではないため，アレンジする際にも使ってもよいと考える。歌の部分では，子どもたちの歌と自分の伴奏どちらにも気をとられるので，無理矢理歌の部分に使うのではなく，あまり手の動きが大きくない方が良いのではないか。しかしながら，高い音や低い音を少しでも使用するだけで印象は大きく変わると推察されるので，ある程度弾くことができるようになれば，使用することも可能だと考える。

4．分析結果のまとめと問題点

ここまで，簡易伴奏譜の分析結果について述べてきたが，様々な特徴が見いだされた。細かい特徴や問題点は，各項目の分析結果で述べてあるため，この節では代表的なものを書いていく。

まず，研究前の予想では，伴奏を簡単にしようとするためにコードがあまり変化せず，さらに和声学のルールにも反しているものが多いのではないかと考えていたが，実際はそうではなかった。もちろん，コードの変化が少ないものも多少はあったのだが，原曲とコード進行は異なるものの，しっかりと旋律に合わせてコードを変化させていたり，臨時記号にも対応させていたりするものもあった。また，和声学のルールに反しているものも，分析を行った部分ではほとんどなかった。ということは，簡易伴奏譜を弾いて違和感を覚えるときに，コード進行は大きな影響を与えていないということになる。

では，どこに原因があるのだろうか。1つ目として，ベース音に違和感を覚えることがあった。数はあまり多くないのだが，実際に弾いているとコードは間違っていないのに音が不協和音のように聞こえるものがあった。それは，ベース音に第3音を使用

しているため第２転回和音になっていたり，そのコードではない音を使用していたりしてあった。そうなると，どうしても響きが悪くなってしまうだろう。これは，指の動きを簡単にするためだと推測した。旋律に適した和音を奏でたくても，指の動きが難しくなってしまうと簡易伴奏譜の意味をなさなくなるのではないだろうか。音の響きよりも，難易度を優先している場合もあると考えられる。

その他の原因として，伴奏のリズムや使用する音がほとんど変化せず，単調になっていたということがあげられる。これは，元の伴奏を簡単に編曲してあるためだと予想する。ベース音の問題点でも既述したように，指の動きをできるだけ少なくして弾きやすくするために単調になっているのだろう。また，指の動きがどれだけ簡単であっても，付点や三連符などの比較的難しいリズムがでてくると，弾きにくくなってしまう。それを避けるために，伴奏のリズムにおいても簡単にしてあるのだろう。

さらに，これは違和感の直接的な原因ではないのだが，簡易伴奏譜には強弱記号や音楽記号がほとんど書かれていないという問題点を見つけた。この原因としては，楽譜をあまり読めない人にでも分かりやすいようにするために，音符以外のものを省いてあると予想される。もちろん，それらがなくても伴奏を弾くことはできる。そもそも強弱記号等を気にする人は少ないのだろう。しかし，簡易伴奏譜だからこそ必要なのではないかと考える。普通に考えれば，簡易伴奏譜を使用する人はピアノを弾くことをあまり得意としない人が多い。そうなると，どの部分を大きな音で弾けば良いのかなど，表現の方法がわからないということもあるだろう。よって，楽譜にそれらが少しでも書かれてあるだけで，弾きやすくなるのではないか。

ここまで，簡易伴奏譜の特徴と問題点を述べてきたが，簡易伴奏譜自体を批判しているわけではない。むしろ，忙しい保育の日々の中で誰もが簡単に弾くことができるため，簡易伴奏譜はなくてはならないものだと思っている。しかし，子どもたちの心を曲に惹きつけ，興味関心を持続させることを考えると，運指の利便性だけではなく，音の響きの美しさや伴奏の楽しさを考えることも必要であろう。そのようなときに，どのように簡易伴奏譜特有の問題点を補っていけば良いのか。その特徴を生かしつつ，問題点を少しでも解消できるようなアレンジ方法を考えていく。

Ⅳ．アレンジ方法の提案

１．アレンジパターンについて

(1) アレンジを行う際の注意点

簡易伴奏譜のアレンジを闇雲に行ってしまうと，反って逆効果になったり，保育者自信が弾くことができなくなったりする可能性がある。また，アレンジの際に伴奏のリズムを変えてしまうと旋律のリズムも変化することに繋がってしまい，子どもたちが歌いにくくなることが予想された。そのような状況を作ってしまうと，せっかくのアレンジが効果を持たない。よって，本研究のアレンジ法では，リズムの変化は使用しないこととし，さらに，伴奏譜のアレンジを有効的に行うためにも，以下の６点に注意しながら行っていく。

①子どもたちが最初に歌うときからアレンジしたものを使うのではなく，初めは元の楽譜を使う。先行研究からもわかることだが，アレンジをすることのメリットは，何度も歌っている曲に再度子どもたちの興味関心を惹きつけることである。初めからアレンジ譜を使っても，このようなメリットはでてこないと考える。ただし，簡易伴奏譜を原曲に近づけるためなど，他に意図がある場合には初めからアレンジ譜を使用することもよいだろう。

②無理してアレンジをしない。アレンジをすることによって，弾くことに集中しすぎて子どもたちの表情を見ながら弾けなかったり，曲が止まってしまっては本末転倒である。保育における歌唱活動では，子どもが楽しんで歌えるということが重要だと考える。そのためには保育者が余裕をもって，子どもたちに合わせて弾くことが必要である。自分の技術に合ったアレンジをするべきであろう。

③アレンジ以前に，楽譜選びの時点で難しすぎる楽譜を選ばないようにする。最初から難しい楽譜を選んでしまうと，伴奏そのものが弾けないということも考えらえる。自分のピアノ技術に合った楽譜を選ぶことも必要である。

④アレンジを行うときには，なるべく旋律を残し活かしていく。アレンジは，子どもたちのために行

うものなので，子どもたちの歌唱の指針である旋律をなくしてしまうことによって，子どもたちが歌いにくいと感じるようあれば，旋律を入れる必要がある。元々旋律のあるもので弾いていたのなら，アレンジしたものにも旋律をいれるべきである。しかし，子どもたちが何度もその歌を歌っており，慣れてきているのであれば，旋律がなくてもよい場合もあるだろう。子どもたちが楽しんで歌うことができ，歌いやすいことを第一に考え，子どもたちの反応や様子を見ながら，慎重に行うべきである。

⑤アレンジを試みる前に，元の楽譜を忠実に弾く努力をする。基礎がしっかりとできていなければ，たとえアレンジを行っても，そのアレンジを有効活用できないと考える。例えば，8分音符なのにも関わらず，4分音符の長さで弾くと曲の持つ雰囲気を重たくしてしまう。そのような部分を忠実に弾くだけでも，原曲の雰囲気に近づけることになるだろう。

⑥当然のことながら，アレンジをすると元の楽譜よりも多少は難しくなる。しかし，難しくなるから無理と諦めてしまうのではなく，練習をすることも大切なのではないか。しかし，一概に練習をするといっても，簡単なことではない。よって，簡単にできる練習方法を以下に提案する。

○指の練習

ドレミファソラシドと順番に上昇し，ドシラソファミレドと順番に下降することの繰り返しを行う。その際の基本的な指番号であるが，親指が1，人差し指が2，中指が3，薬指が4，小指が5とすると，右手の場合，上昇の時は1.2.3.1.2.3.4.5，下降の時は，5.4.3.2.1.3.2.1となる。左手では，上昇の場合，5.4.3.2.1.3.2.1であり下降の場合は1.2.3.1.2.3. 4.5となるように弾く。片手ずつでも両手でも良いが，伴奏の練習を行う前などに何度か行うだけでも指が動くようになる。簡単に短い時間で行うことができる。このような音階の練習は様々な調でできるため，ハ長調がうまくできるようになったら，次の段階として他の調で練習することを薦める。

○3連符の練習

3連符は童謡の旋律にも時々見られるリズムである。3連符を歌うときに難しさを感じる人はあまりいないと思うが，ピアノで弾くとなると難しく感じる人は意外と多いのではないか。このような場合には，弾いて練習するのではなく，言葉を使い体感でリズムを捉えると3連符を弾くことができるようになるだろう。具体的には，3文字の言葉を言いながら弾くというものである。例えば，「すいか」という言葉である。3文字の言葉のリズムと，3連符のリズムは等しいため，3連符だと捉えずに3文字の言葉として考えると，弾きやすくなるのではないか。

○付点のリズムの練習

付点も3連符と同様に，体感で身に付けていくことが望ましいのではないか。付点のリズムは―厳密に言えば全く違うのだが―スキップと似たリズムと言うことができる。スキップをしている感覚で弾くと，付点のリズムをイメージしやすくなるのではないか。難しいリズムは，まずそのリズムを感覚的につかみ，イメージをしなくてはならない。その段階で，体で覚えると効果的である。

以上のように，指の練習やリズムの練習を行うだけでもピアノ技術が変化してくると思う。そうするとアレンジしやすくなるうえに，そもそも日常生活で歌唱活動を行う際に，アレンジを行わない場合でも役立つと思う。短時間で練習を行うことができるため，アレンジをする前に行うことを薦める。

(2) 基本のアレンジパターン

(1) では，アレンジの際の注意点を書いたが，ここからは具体的にどのようにアレンジを行うのか実際の楽譜を用いながら説明していく。また，ここで提案するものは，ピアノを弾くことがあまり得意でない人でも比較的簡単にアレンジを行うことができるような難易度のもののため，コードの変化や前奏のアレンジなどの難しいものは省いてある。アレンジのパターンは以下の7通りである。

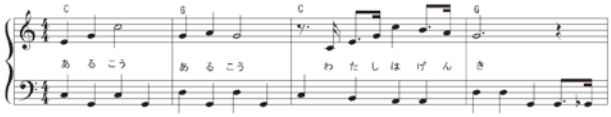
1．左手の伴奏に音を加える

伴奏がどこか簡素に感じる場合には左手の伴奏が単音の場合が予想される。そのようなときには，左手の伴奏のどこか一部（簡素に聞こえる部分など）に，音を加えると物足りなさが解消されるだろう。音の加え方は以下の通りである。

・1オクターブ下，または上の音を加える。1オクターブ上の音でもいいが，右手とぶつかることが予想されるので，適宜変える。基本的には1オクター

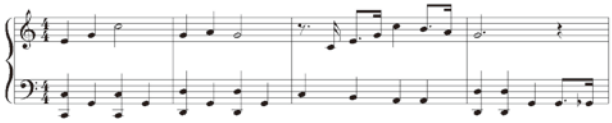
ブ下の音を付け加えたほうが響きは良い。

＜譜例　さんぽ＞



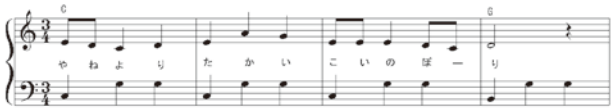
楽譜⑤　p .96 より一部抜粋して編集

＜アレンジ譜＞



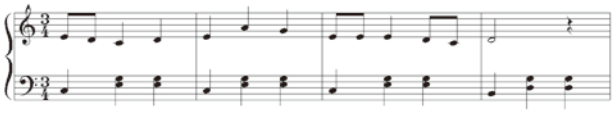
・コードの第 3 音，第 5 音，第 7 音，第 9 音を付け加える。ただし，第 3，7，9 音が音の一番下にくるように弾くと，和声学の中では響きが悪くなるとされているので避けると良い。その他は特に決まりはないため，第 5 音や 3 音など様々な音を試してみて，好きな響きのものを採用すると良い。第 3 音や第 5 音はきれいな響きになるのだが，第 7 音や第 8 音は不思議な響きになったり，ジャズのような響きになったりすることもあるため，使い分けていくことが望ましいと考える。

＜譜例　こいのぼり＞



楽譜⑤　p .37 より一部抜粋して編集

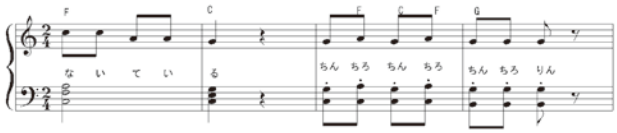
＜アレンジ譜＞



２．歌詞が擬音語などのときは，旋律伴奏共に１オクターブ上の方で弾いてみる。

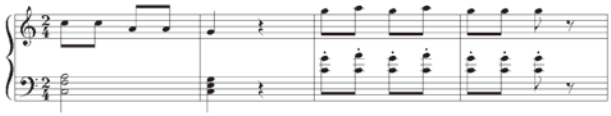
伴奏の音自体は変えず，弾く場所を変えるだけでよいので，簡単にアレンジできるのではないだろうか。しかし，音が１オクターブ高くなるだけで印象が全く異なるため，有効なアレンジ方法であろう。

＜譜例　虫のこえ＞



楽譜⑤　p .134 より一部抜粋して編集

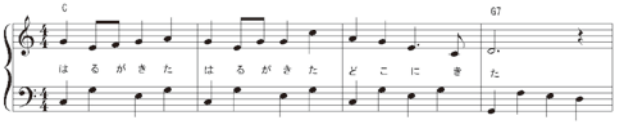
＜アレンジ譜＞



３．左手の伴奏形態を変化させてみる。

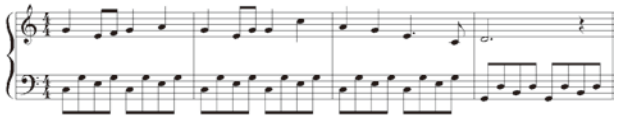
何かアレンジしたいと思う場合には，伴奏のリズムが曲の初めから終わりまで，殆ど４分音符で刻んでいることがある。旋律が楽しい雰囲気の曲では，旋律に合わせて楽しめる伴奏の方が違和感なく聞こえる。一番簡単な変化のさせ方は，コードの音を分散和音にして弾くということである。分散和音ならば手の位置を殆ど変えずに引くことができるため，比較的簡単であろうと考える。

＜譜例　春が来た＞



楽譜⑤　p .82 より一部抜粋して編集

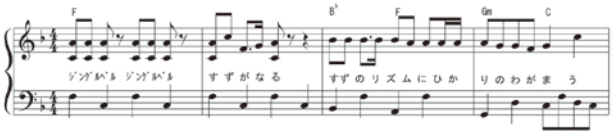
＜アレンジ譜＞



４．伴奏を旋律のリズムに合わせる。

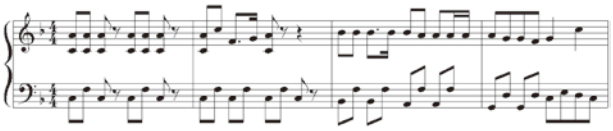
３．と共通する部分もあるのだが，この場合は伴奏形態を変化させるのではなく，一部を旋律のリズムに合わせるというものである。旋律に伴奏のリズムが合うだけですっきりと聴こえる。

＜譜例　ジングルベル＞



楽譜⑤　p .63 より一部抜粋して編集

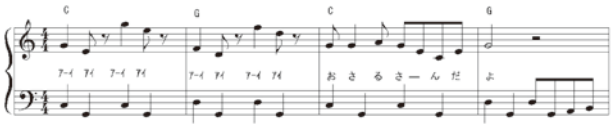
＜アレンジ譜＞



５．４分音符だったものを８分音符で弾いてみる。

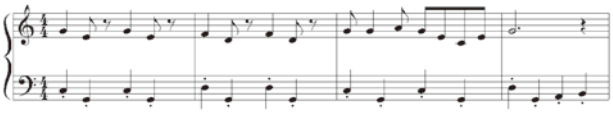
曲調が弾むようなものであるにも拘らず，伴奏が４分音符になっていると曲の雰囲気にそぐわなくなってしまう。そのため，その音を８分音符（４分音符のスタッカート）として弾くだけで随分変化があるうえに，簡単にできるアレンジである。また，この曲の場合では 2. のように右手をオクターブ上で弾くように楽譜が書かれているが，歌詞が擬態語等というわけではなくリフレインの部分なので，通常の音域に下げてある。１回目と２回目に変化と付けたい時は，オクターブ上での演奏が可能ならば，元の楽譜通りで良いであろう。

＜譜例　アイ・アイ＞



楽譜⑥　ｐ.80 より一部抜粋して編集

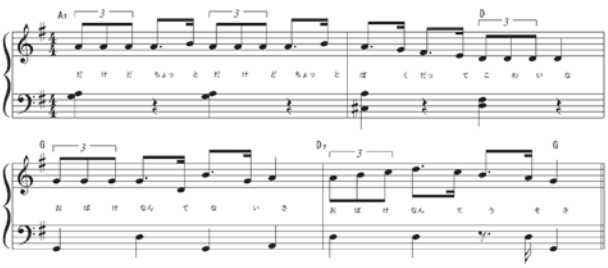
＜アレンジ譜＞



６．伴奏に強弱をつける。

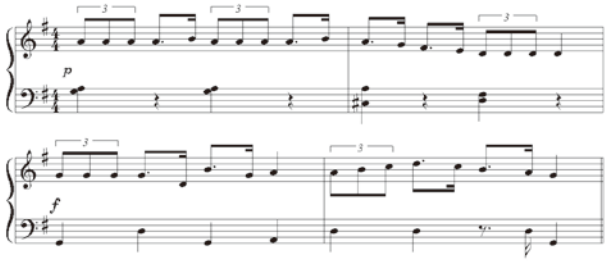
静かな部分は静かに弾き，元気な部分は大きく元気いっぱいに弾く。もしくは繰り返すときに異なる奏法で弾くだけで雰囲気が変わる。このアレンジでは弾く音は全く変化しないため，すぐにでもできる。

＜譜例　オバケなんてないさ＞



楽譜⑤　ｐ.120 より一部抜粋して編集

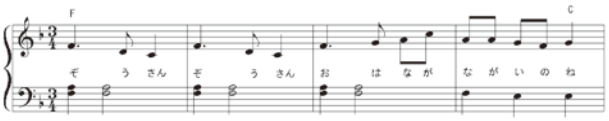
＜アレンジ譜＞



７．右手をコード弾きにする。

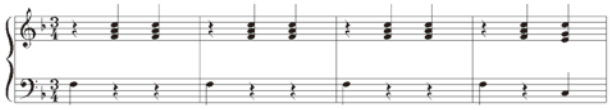
右手はコードの音で４分音符のリズムで弾き，左手は根音で弾くという形にする。ただし，このアレンジ法には旋律がなくなるという問題点がある。先でも述べたのだが，旋律がなくなると子どもたちが歌いにくくなる場合がある。それが予想される場合には，このアレンジ法は使用しない方が良い。

＜譜例　ぞうさん＞



楽譜⑥　ｐ.24 より一部抜粋して編集

＜アレンジ譜＞

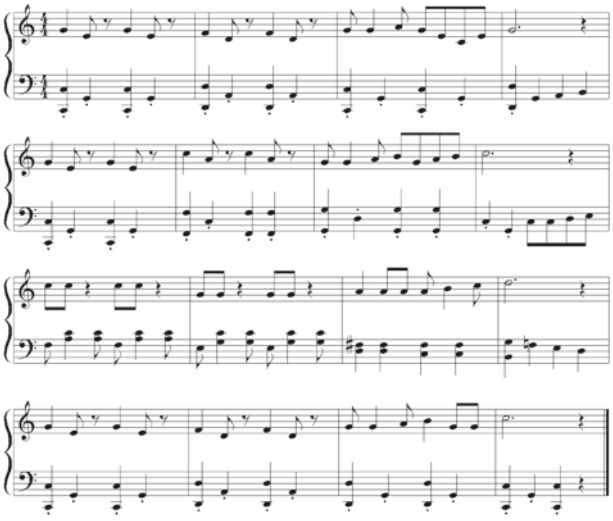


２．具体例

前節では，アレンジの基本的なパターンをいくつか提案した。次に，ここまで提案したアレンジパターンを使用して，１曲全てをアレンジしたものを記載したいと思う。ここで，使用した曲は２曲で，「アイ・アイ」と「どんぐりころころ」である。これらを使用した理由としては，アイ・アイは実際に伴奏を弾いてみた結果，もっと元気のよいアレンジを加えたいと思ったためである。「どんぐりころころ」は，単調な伴奏のためもう少しアレンジを加えてみたいという思いをもったためである。

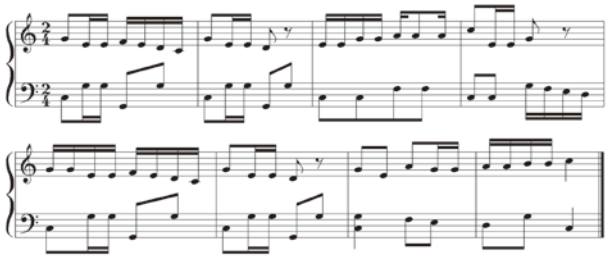
なお，本来ならば元の楽譜も掲載すべきなのだが，著作権の観点から１曲全てを載せることができないため省略する。また，前奏は省いてある。

＜アレンジ譜１　アイ・アイ＞



１～７，13～16 小節は，左手の伴奏に１オクターブ下・上の音を付け加え，元の楽譜よりも音が多く聴こえるようにした。さらに，９～11 小節目では，元の楽譜が２分音符ずつ伸ばすようになっていたため，もう少し元気な雰囲気をだしたいと考え，シンコペーションを用いることによって，伴奏のリズムを旋律のリズムに近いものになるようにアレンジした。また全体的にスタッカートを加えることにより，曲のもつ元気な雰囲気を出せるように工夫した。なお，この曲で使用したアレンジパターンは前節の番号を用いると，1，4，5 である。

＜アレンジ譜２　どんぐりころころ＞



元の楽譜では，１拍ずつ伴奏が動いていた。しかし，この曲は４分の２拍子のため，１拍ずつ動くとあまり伴奏に動きのないものとなってしまう。時には身体の動きも交えて歌う曲でもあるため，リズム感の良いものにしたいと考え，上記のようにアレンジを加えた。なお，使用した基本のリズムパターンは，前節の番号を使用すると，1，3，4 である。

ここまで，２曲のアレンジを行ったが，アレンジを行いたいと思う曲や，どのようにアレンジを行いたいと思うかにより，使用するアレンジパターンは異なる。それに合わせるためにも，すぐに使用するアレンジパターンを決定するのではなく，いくつか試してみてじっくり考えた方がより良いものになるだろう。

Ⅴ．まとめ

ここまで，簡易伴奏譜の分析に加えアレンジ法の提案も行った。簡易伴奏譜は，研究当初に予想していたことに反し，コード進行に違和感があるものも少なく和声学のルールに則っているものがほとんどであった。しかし，伴奏のリズムが単調になる，音楽記号がほとんど使用されていない等の特徴も見られた。このような特徴をもつ簡易伴奏譜であるが，だからといって簡易伴奏譜を使用してはならないと考えているわけではなく，現役で働く保育者にはとても役立つ楽譜であると思っている。中には十分に伴奏を工夫してあるものも多くあり，それを使用することによって余裕をもって弾くことができ，子どもたちと楽しんで歌唱活動等を行うことができるのであれば，積極的に使用すべきであろう。しかし，単調な伴奏ばかりだと，子どもたちの飽きに繋がることもあるということは否定できないのではないだろうか。

伴奏のアレンジに関しては，比較的簡単にできるものを提案した。伴奏の音そのものを変えてしまうと，再度の譜読みを行う必要もでてくるうえに，難易度が大幅にあがることが予想される。そのようなことを防ぐために，音を変化させることをできるだけ避け，弾き方の変化などを意識した。アレンジを行う際には，無理矢理アレンジを行うことは避けたい。アレンジは使用するタイミングが重要になる上に，そもそもアレンジが必要ないこともあるだろう。伴奏を行っていて，何か違和感がある，物足りない，子どもたちの興味をもう１度歌に戻したいと思うときなどにアレンジを行うことが好ましい。大切なのは，保育者も子どもたちも全員が楽しんで行えるということであろう。アレンジを行うことに必死で，子どもたちのことを見ることができなくなってしまうのは本末転倒である。

もし，今回のアレンジ法でも運指が難しいと感じる場合や，さらに変化を付けたいのであれば，ピア

ノ・オルガンの部分を減らし，楽曲に合わせて子どもたちに簡単な打楽器を使用させることも考えられる。例えば,基本のアレンジパターン2で用いた「虫の声」の場合，歌詞に登場する虫の声を楽器で表現するには，どのような楽器が相応しいかを子どもたちと一緒に考えながら歌唱活動を行うことも可能であり，アレンジ方法の一つであろう。これらの方法を使用すると，ここで紹介したものよりもさらにアレンジを加えることができるだろう。さらには，子どもの器楽活動へも繋がり，表現の幅を広げることも可能である。

今回のアレンジ法より難易度を上げるならば，コードを変化させたり，伴奏のリズム（旋律のリズムを含む）を変化させたりなど，様々な方法がある。また，子どもたちの声域に合わせて移調をすることも大切なアレンジ法である。しかし，上記は音楽理論の基礎やコードネーム等を理解していないと難しい。一方，電子ピアノやキーボードが用いられることも多くなってきているという。これらの楽器は移調機能や様々なリズムに対応する機能が備わっている場合もある。和音を正しく弾くだけで，ボサノバ，ワルツ，サンバ等の雰囲気を出せるのである。鍵盤楽器に苦手意識を持つ人には便利だが，ここでもコードネームの習得は不可欠だと考える。

保育士は，常に自己研鑽に努めなければならないのだが，ピアノの技術を磨くことや音楽理論の習得も自己研鑽の１つだと考える。忙しい日々の中ではなかなか難しいことなのかもしれないが，だからといって何もしなければ，伴奏の技術を伸ばすことはできず，子どもたちは気持ちよく歌うことができないだろう。子どもたちが楽しめる保育を提供するためにも，ピアノ・オルガンの練習とともに，音楽理論の習得も必要だと感じる。伴奏は歌唱において主役ではなく脇役である。しかし，歌唱に大きな影響を与えることも事実である。主役は歌う子どもたちだからといって疎かにするのではなく，子どもたちが「楽しかった」「もう一度したい」と思える活動を行うために，主役を支えるという大きな役割を担っているという自覚をもって，伴奏に努めていく必要があるだろう。

引用・参考文献

・虻川圭實　2006,『子どもの音楽的成長を促す保育施設での音楽活動を考える－子どもの主体的な音楽活動について－』p.23-58，九州大谷研究紀要
・大野恵美・赤井裕美　2013,『保育現場の音楽表現活動の実態と短大教育の在り方に関する研究－保育者養成校における音楽教育－』p.1-17，湘北紀要
・小澤和恵　2008,『保育所・幼稚園実習で求められる音楽活動の考察－「生活の歌」と「季節の歌」について－』pp.37-47，埼玉純真短期大学研究論文集
・鍛冶礼子・小林直実・紫竹英恵・宮野モモ子　2006,『幼児への歌唱指導についての一考察－自分から歌う時の声域－』p.63-68，千葉大学教育学部研究紀要
・紙屋信義・後藤みゆき　2008,『ピアノによる子どもの歌伴奏の効果－アレンジによる伴奏法を考える－』pp.67-75，東京未来大学研究紀要
・酒井貴　2008,『幼児の歌におけるピアノ伴奏法について』p.50-60，聖霊女子短期大学紀要
・庄司洋江　2010,『歌う表現活動の展開例』,「新・保育内容シリーズ５　音楽表現」，p92-106，一藝社
・松本俊穂　2001,『幼稚園・保育園におけるピアノ・オルガン，弾き歌いに関する現状と課題～保育現場におけるピアノ・オルガン，弾き歌いに関する意識調査をもとに～』p.1-30，長崎純心大学・長崎純心短期大学，幼児教育．特別号
・横井志保　2011,『領域「表現」に関する調査研究－音楽的表現における保育者の意識と実態について－』p.125-130，名古屋柳城短期大学研究紀要
・2018,『保育所保育指針解説』，厚生労働省
・2018,『幼稚園教育要領解説』，文部科学省
・2018,『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説』，内閣府，文部科学省，厚生労働省
・足羽章編著　1999,『日本童謡唱歌全集』，株式会社ドレミ楽譜出版社
・友田満　2012,『保育のピアノ伴奏　子どもの大好きな歌150曲』，株式会社日本文芸社
・富永靖弘　2014,『やさしく弾けるピアノ伴奏保育の歌12か月』，神星出版社
・1991,『保育の四季　幼児の歌110曲集』，株式会社エー・ティー・エヌ

・長谷川知彦（発行年不明），『新版みんなのうたピアノ伴奏曲集』，株式会社光文書院

付記

本研究は石川が 2016 年度に富山大学人間発達科学部に提出した卒業論文の一部を千田の責任において加筆・改稿したものである。

（2018 年 10 月 19 日受付）
（2018 年 12 月 19 日受理）